

●コレクション・データ

時代 弥生時代 中期
採集地 唐古・鍵遺跡 第13次調査
発見年 1982年
大きさ 長さ7.2cm・幅3.9cm
展示位置 第2室・「弥生の住まい」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 37

火を熾す道具 火鑽臼

人類による火の利用は、約40万年前の旧石器時代に始まったと考えられています。当初は、火山や山火事などの火を利用したとされていますが、発火具の開発のよって火の管理が可能となりました。以来、人類にとって火は日常生活に欠かせないものとなる一方、火を神聖なまつりの場に取り入れることにもなりました。

さて、日本では縄文時代から発火具が出土しますが、今回は唐古・鍵遺跡から出土した2000年前の火鑽臼を紹介します。

この資料は、ヤマグワの材を断面凸状に加工した板で、凸部の上面が4カ所丸く炭化して凹んだものです。また、この丸く凹んだ横には、縦に細く溝が彫られ、火の粉が下の台部に落ちるようになっています。

ところで火の熾し方には、打ち石による衝撃法、凸形レンズから火を取る光学法、火鑽臼による摩擦法があります。この摩擦法には、人の手で発火棒（火鑽杵）を揉む揉鑽法と、発

火棒を紐で弓（横木）に結びつけ弓を上下させて発火棒を回転させる舞鑽法の二種があります。唐古・鍵遺跡では、発火棒と断定できるものはなく、揉鑽法か舞鑽法かを判別することはできません。登呂遺跡では弓と考えられる木製品が出土しており、弥生時代から舞鑽法が存在したことは確かです。

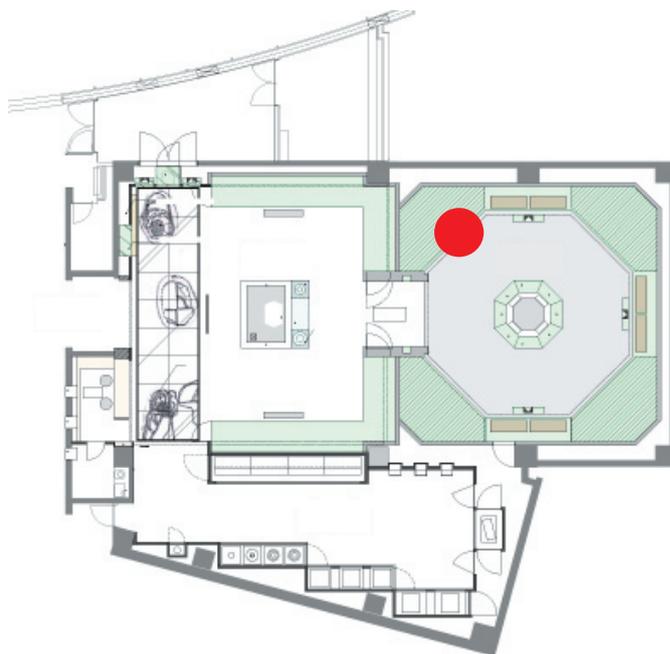
出雲大社（島根県）や弥彦神社（新潟県）では、新嘗祭や国造の交替式の神事に際し、揉鑽法で火を熾していました。また、伊勢神宮では神饌を炊く火を熾すのに舞鑽法が用いられており、摩擦法による発火には、神事との深い関連が認められます。

今回紹介した火鑽臼は、箕や丹塗り盾、甕など祭祀的な遺物とともに環濠に廃棄された状態で出土しています。これらの遺物から火鑽臼によって熾した「火」が重要な役割を果たしていたことが想定できるとともに、弥生の人たちの「火」を神聖視する姿が読み取れます。

唐古・鍵考古学ミュージアム

【 34・7100】
▼大人 2000円（1500円）
▼高校生・大学生 1000円（500円）

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）



ミュージアム上面図と展示位置